



特240

913

石坂精一著

10
セン

1



0056154000

0056154-000

特240-913

乱舞するスパイの群れ

石坂精一・著

昭和書房

昭和13

AJB

この著作物は、著作権者不明のため、著
第67条の規定に基づき、平成12年3
月で文化庁長官の裁定を受け使用するも

特240
913

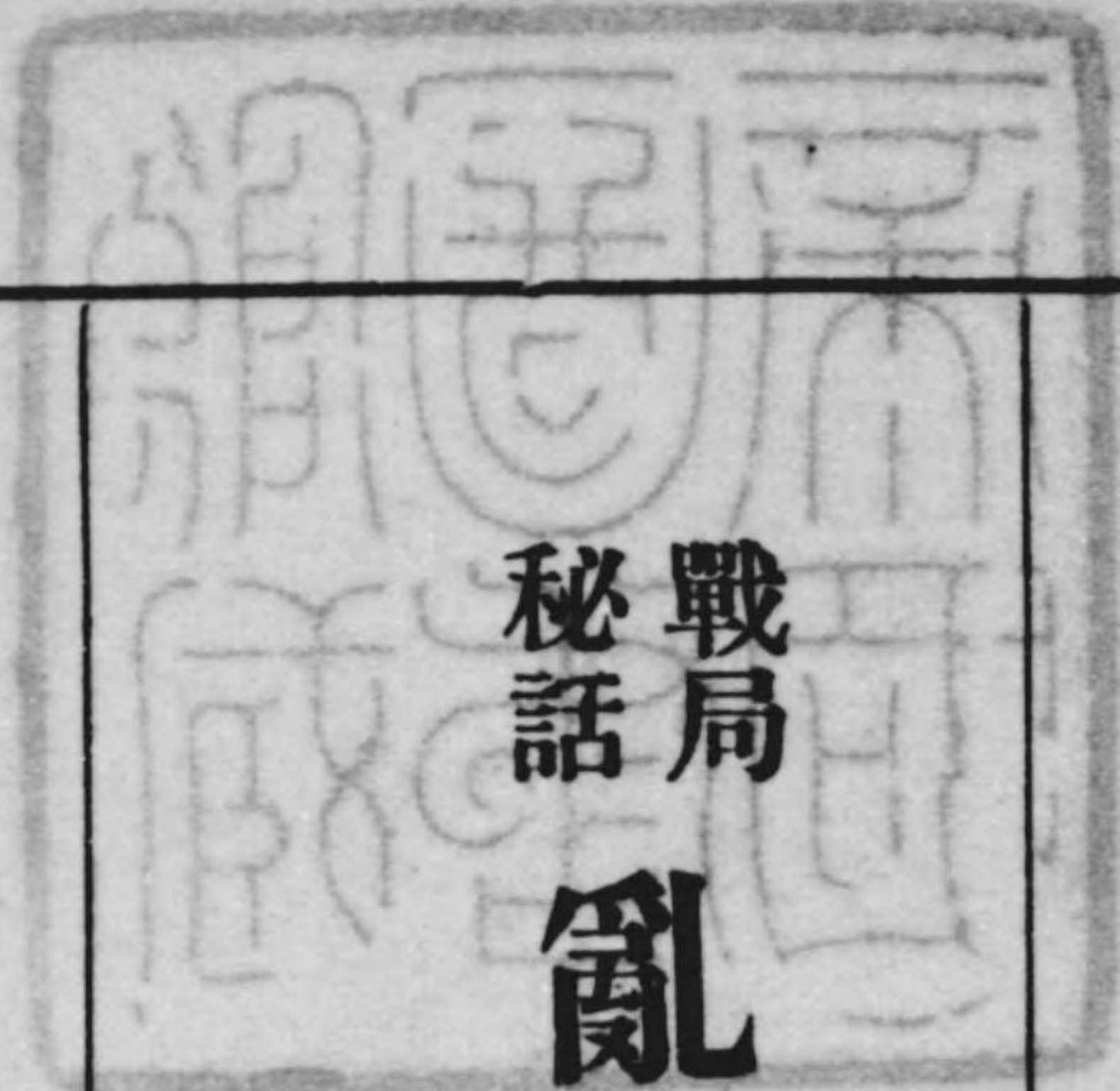
石坂精一著

戦局
秘話

亂舞するスパイの群れ

|| 機密の裏に機密 ||

昭和書房版



目次

一、新設の牒報機關……………(一)
二、第二の滿洲事件……………(八)
三、バアラーの密談……………(二三)
四、スパイ亂舞の巷……………(一四)
五、怪紳士の出現……………(一七)
六、流言は飛ぶ……………(二〇)
七、不思議な事實……………(二三)
八、誘拐から監禁へ……………(二七)

時局
秘話
亂舞するスパイの群れ

石坂 精一

一、新設の牒報機關

江南申報の特派員としてロンドンに居た張好山が三年振りに懐しい上海に歸へつて來たのは、丁度五月の始頃であつた。

幾日かを歸朝匆々の落ち付かない心持ちで暮して居ると、豫てロンドンで別懇にして居た鄭敬周が、外交部の牒報部で最高の地位を占めて居ると聞かされ、急に逢つて見たくなつた。そこで張は早速新聞社から一週間の暇を貰ひ、即日南京に赴いて外交部を訪問した。

折好く鄭敬周に逢へた、鄭は此珍客を迎へ、其夜二三の腹心と共に張のために南京有数の某飯店に晚餐會まで開いてくれた。

相逢はぬこと一ケ年になるが、鄭は見違へる程相貌が變つて居た、ロンドンに居た時には、何處から見ても貴公子然たる男であつたが、今は決して然うでない。

顔の色は日焦けでもしたのか少し薄黒くなつて居た、眼は底光りがして居る、彼の悠揚迫らなかつた態度は、今は何ものかと常に競つて居るかの様に争氣満々として居る、牒報部最高の地位に据えられ、日々神経を費ひ減して居るためであることは、容易にうなづけることであつた。

食卓ではロンドン駐在當時の回顧談や、歸朝後に演じた珍談奇談に花を咲かしたが、食後二人の腹心が先に歸へつて仕舞ふと、鄭は張を更に奥まつた談話室に通した、云はずと知れた名は喫煙室だが、其實は密談室だ。

坐が定まるか定まらぬ内に、鄭は待ち構えて居た様に固く張の手を握つた。

「ヤア、能く訪ねて来てくれた、僕は君のことを忘れて居た譯ではないが、こんなに早く歸へつて來るとは思はなかつた」

「私もこんなに早く歸へれるとは思ひませんでした、もう一年位はあちらに居るつもりで居たんですが、急に新聞社の方に移動があつたんで歸へつて來ることになつたんです」

と張も豫期した鄭の態度ではあつたが、その餘りに熱心な歓迎振りに少なからず感激を感じ快活に答へた。鄭は嬉しそうに肯いて

「君に残つて貰つたのは外ではない、どうも牒報部の仕事が思ふ通りに行つて居ないんだ、東京にも千人近くの牒報員が派遣してあるんだが、之と云ふ氣の利いた牒報が少しも入つて來ない、日本を知らない其上永らくヨーロッパにあつた君に、こんなことを相談するのは無理かも知れないが、何とか良い方法はないだらうか、君の手腕はロンドンに居る時に既に十分拜見して居る、何か良い考へはないかと相談する次第だ」

と鄭は一寸張の心を読む様な眼で其顔に一瞥を投げた。

「サア、今差し當つて之と云ふ案はありませんが一つ考へて置ませう」

「是非何んとか考へて置いてくれ給へ、北支の方だつて何が何んだか少しも判つて居ない、來る情報も來る情報も、こゝに居て考へられる以上に一步も出て居ない、軍政部の方には多少重要な

情報が入つて居る様に思はれるが、それさへどの邊までが確實性があるか疑問だ」

「東京が駄目で、北支が駄目、其上軍政部に入る情報が疑問とあつては、我國の牒報機關は無きに等しいではありませんか」

「無論然うだ、軍政部の方へは毎週一回出張して情報の交換をして居るが、外交部の重要な情報は主に上海が中心と云ふ有様だ」

「ハア、して見るとロンドンに居た方が、日本の模様が能く判ると云つた様な譯ですね、あの時は全く手に取る様でした」

「もつとも今から考へて見ると、あのロンドンに入つて来る日本の情報と云ふのが主に上海中心の情報であつたからね、僕としては上海もだが、もつと北平なり日本から直接に有力な情報を取り度いのだ、之に就て何か良い案があるまいか」

鄭の相談は益々熱して来る。まだ歸國したばかりの張としては、再び「考へて置きませう」を繰返へすより外に判然とした返事をする事が出来なかつた。

一時間ばかりして張は鄭と別れた。そして晝間の内に取つて置いた旅館に歸へつた、夕食は既

に済んで居るのだが、食堂に入つて好物のビールを傾けながら、鄭から相談された牒報機關の完備について考へるともなく考へて見た。

（東京が駄目で北支が駄目、其上軍政部に入つて来る情報が當てにならぬとあれば鄭の心配するのも無理がない、ロンドンに居た頃は人一倍世話になつて居るのだから、此際是非骨を折らなければならぬ）と數時間前の會見を思ひ返へして張は頻りに思ひに耽つた。

翌朝張は鄭の許へ電話をかけた、自分としては別に之と云ふ考へはないが、兎に角上海に歸へつて牒報網設置の下準備をして見たいと思ふ旨を傳へた。鄭は非常に喜んで即刻役所に來るやうにとのことであつた。

張は再び外交部を訪問した。心なしか知らないが、今日は玄關の守衛までが昨日に比べて丁寧であるやうに思はれた。張は無論得意であつた。

鄭の室を訪れると、もう鄭は幾何かの機密費をポケットに忍ばせて待つて居た。張の決意の大意を聞くと

「張君運動費と云つては甚だ輕少だが、是非之だけ取つて置いてくれたまへ、不足の際には何時

でも送るから……」

と紙包みを張の前に置いた。張は

「それなら兎に角お預りして置きます。先づ上海には知つて居る外人も多少は居ます、それ等から傳手を求めて、今までとは異つた牒報機關を作つて見ませう」

と云ふと鄭は「是非頼むツ」と張に満幅の信頼を傾けて居るかの様に力強く肯いた。

張は外交部を出ると一寸旅館に立ち寄り、急用が出来たと云つて支拂をすませ、其まゝ車を停車場に乗り付け、上海列車の中の人となつた。

張は前にも云つた通り、江南申報の特派員として三年ばかりロンドンに居たが、外交上の秘密を探つて來ることに妙を得て居た。大使館に遊びに來てよく鄭と歡談したが其話の大部分が得難いニュースであつた。

英國の大官連の消息、各國外交官の模様、殊に日本大使館の動靜などは手に取る様に詳しくかつた。鄭は此點に於て全く張に敬服して居た。

更に驚いたことは、何かの問題で一緒にジュネーヴに行つた時、支那代表部の牒報は其大部分

が張のもたらしたものばかりで、その何れもが確實であつた。

流石にヨーロッパの外交舞臺に活躍して居た顧維鈞其他の俊材も、張の機敏さにはいづれも舌を捲かぬものはなかつた、だが政府の大官であると云ふ位地や多忙のため張には親しく會はなかつた、唯だ鄭のみは友人と云ふので始終張に會つて居た。之等の關係から鄭が最も張と親しく且つ其才幹を認めて居た。

張にしても歸朝以來記者生活には稍々飽き氣味であつた。何か適當の仕事があるならば、其方に移り度いと思つて居た際であつた。鄭からの相談は全く渡しに舟である、勢ひ其心は將來の希望に躍らざるを得なかつた。

上海に歸へつた張は、早速二三の外人を訪問した、そのいづれもが△人である。中には歸國の際同船して親しくなつたものもあつた、露骨には計畫を打ち明けなかつたが或る通信事務を引受けたので適當の助手はないであらうかと頼んで見た、無論別々にである。

八九枚の紹介狀を得た張は、其翌日から未知の人を訪問することに日を暮した。會つて見ると商人とか會社員と云ふのは名ばかり、その大部分は牒報で飯を食つて居るらしい人ばかりだ、張

は大いに満足した、何れも一ケ年の契約を結び、一週間後にはフランス租界の一角にある或るホテルの立派な一室に事務所を設けた。張はまた其等の通信員の紹介状を携へて今度は北平に旅行した。

北平でも七八名の△人に會つた。上海でと同じ様に一ケ年の契約で通信を依頼した、そして滞在約一週間ばかりの後、再び上海に歸へつて來た。

来る／＼情報は毎日の様に彼の机上に堆高く積まれた。二名の助手は之が整理に毎日時間一ぱいに働いた、が其多くは普通の新聞材料の範圍を脱して居なかつた。張は獨りつぶやいた「之で可いのだ」

二、第二の滿洲事件

上海がスパイの巢窟であると云ふことは、誰れも知らないものはない周知の事實だ。若し上海からスパイを除き去つたならば、國際都市としての上海の價値は恐らく半減されて仕舞ふであらう。之は決して誇張された言でも何んでもない。残されるものはギャング、賭博、密輸密造と淫

賣ばかりだ。犯罪と享樂が其すべてである。

張は三年間留守をした上海が、依然たる上海であることに依つて何の興味も持たなかつた。がそれでも毎晩總ゆる暗黒面をぶら付いて歩いた。ダンスホールは勿論、ホテルのバー、喫茶店、凡そ上海在住の外國の軍人や外交官の出入する場所には事務所に通ふ様な熱心さと忍耐を以て出入りした、そして一會社員として多くの内外人に知己を得た。無論其中には女性も多數に含まれて居た。

六月末の或る晩のことだ。少し飲み過ぎたウキスキーに正體もなく酔ひどれた張が、馴染の女の肩に凭れながら、ワイダホテルのパアライを出やうとすると、濃艶無比とも云ふべき支那女を連れた二人の西洋人が、之れ亦た好い加減に酔つて何やら頻りに喋り合つて居た。

張は聞くともなしに其話に耳を傾けながら其側を通らうとすると、

「第二の滿洲事件」

と云ふ言葉が鋭い針の様に彼の耳を刺した。彼は電氣にでも打たれた様に感じたが、其まゝ其西洋人一座から餘り遠からぬ卓子の上に故意と倒れ掛かり、ボーイを呼んでビールを命じた。

「マア、またお飲みになるの……此上お飲みになつてはお家へ歸へられないのよ、おやめなさいね」

と連れの女は眉根をひそめて注告した。

「何、可いさ、お酌をしてくれ……」

と云ひながら少し聲を低めて

「オイ、あの女を知つて居るか」

と二人の西洋人の相手になつて居る例の濃艶無比の支那女に目くばせした。

「エ、知つて居るわよ、亞爾倍路のシグノンダンスホールに居るダンサーだわ」

「名を知つて居るか」

「知らないわ」

「聞いてくれよ、ボーイに……ボーイなら知つて居るだらう、あれはたしか俺の従妹の友人で、従妹が探して居る女だ、名を聞いてくれ」

「そう」

連れの女はビールを持つて來たボーイに其女の名を尋ねた、ボーイはあの女を知らないのかと云はぬばかりに

「シグノンダンスホールの宋秀蘭です」

と教えてくれた。女は

「マア、あの方が秀蘭さん、名前は夙から聞いて居たが、始めて見たわ」

と云つて、張の耳許に口を寄せ

「シグノンダンスホールの宋秀蘭さんですつて……」

と囁いた。

「然うか、可し々々、従妹に聞いて見てやらう」

と張は始めの熱心に引換へ、甚だ物臭さそうに二三度うなづき、卓子の上のビールコップを取り上げ、一氣に嚙干して仕舞ふと直ぐに立ち上り、

「歸へらう……」

三、パアラーの密談

一一

其翌晩遅くなつてワイグホテルのパアラーに現はれた男女の支那人客があつた。男は張であり女は昨夜の宋秀蘭だ、張は相變らず酔つて居た。

「オイ、君は昨夜もこゝへ來たろう、僕は知つて居るぜ、二人の西洋人と……」

「エ、來てよ」

「誰れだ、あれは」

「あれは△國領事館のOさんと、貿易商のTさん」

「ナカノ、面白そうな人だね、今に紹介してくれるよ、戦争でも始まると云ふのかい」

「エ、そんな話でしたわね、日本人が大分通州方面に入込んだそうです」

「日本人がいくら通州に入込んだからつて、戦争があると決つて居るものか、一寸神經過敏過ぎらア」

「イーエ、それが唯の日本人ぢやないんですつてさ、皆な軍人ですつて、Oさんの話では千人以

上だらうと云ふことなんです」

「そりや大變だ、今にこゝにもやつて來るぞ」

「そんなことはないわ、Oさんも云つてましたわ、日本でも此前には上海で散々手を焼いて居るし、其上に上海の防備はあれ以來非常に堅固となつて居ることは日本でも知つて居る、こつちから手を出さない限り、此前の様なことはあるまいつて、けれども北支の方はどんなになるか判らないそうですね。山海關には大砲や飛行機がもう山の様に積んであると云うぢやありませんか、日本は何處まで支那を取らうと云ふんでせう、ほんとうに憎らしいわ」

「然うだね、今度折があつたら其のOさんとTさんに紹介してくれよ」

それから三四十分を経てから張は事務所に歸つた。固く閉された張の室から時々こんな聲が漏れて來た。

「ウム、デマだと云はれて居るですか……でも△國領事館員の漏した話ですが……そちらにはどんな風に情報が入つて居るんですか……然うでせう……イヤそれが危険なんですよ……軍部萬能ですからね、今の内閣であるからと云つたつて油断は禁物です……明日北平へ行つて見ようと思

つて居ますが……イエ兔に角油断はして居られませんよ、それならまた……」

電話のベルが鳴つて話の聲はそのまゝ消えた、後は元の静寂、南京への通話であつた。

四、スパイ亂舞の巷

張は北平に赴く途中、南京に下車して外交部を訪問し、鄭といろく打合せたことは勿論であつた。張の北平に於ける活躍は實に素晴らしいものであつた。總ての情報は今まで外交部に集まつて居た情報を悉く覆へすだけの威力を持て居た。張は變装して山海關の情勢まで詳細にわたつて調べ上げた。そして天津に引返へして來た時に、蘆溝橋の日支兩軍衝突事件が起つた。

急遽北平に歸つて來た張は、先づ支那軍大捷の報に市中が頗る活氣付いて居ることを發見した。張の豫感としてはどうも事件は擴大するらしい、不思議にも第二滿州事件と云ふ言葉が思ひ出されて仕方がない。

そこで張はトランクを停車場に預けたまゝ、直ぐに自動車を飛ばせて各通信員の許を歴訪した。

「イヤ一寸した間違いから起つたことですよ……日本の駐屯軍と云つても微々たるものであるし如何になんでも此上積極的に出ることはありませんまい、事件は一兩日中に解決しますよ、しかし斯う抗日思想が盛んではけふも小競合、あすも小競合ひと云つた様に、小競合は駐屯軍が撤去するか、或は廿九軍が撤退せざる限り今後益々多くなるばかりでせう。それがまだ何處まで發展するかは、神様だけが知つて居ることです」

と云ふのが多くの通信員の意見であつた。

張はこゝで方面を換えた。今後は幸ひ鄭の紹介状を持参したので之を頼りに南京政府直屬の特別任務にある者を歴訪して見た。處が此方面は事件の成行きを監視しやうと云ふのではなく、寧ろ事件を擴大させやうと計畫中だ。

いざ開戦となつたら、先づ山海關以西の鐵道を何時でも破壊しやうと云ふのだ、それと同時に手當り次第にテロ行爲を以て日本軍の行動を妨害しやうと云ふのだ。いづれかと云へば蘆溝橋事件の勃發を機會として、北支一帯に一騒動を持ち上げやうと云ふのが此人々の考へである。

南京政府直屬の特別任務團は北平西城の一民家に本據を置いて居た。表面は些やかな雜貨商だ

が、床下には最新式の短波無電装置まであつた。張はこうした一派の行動に或る魅力を感じた。

二三回訪問する内に、張は團長格の陳了成とはもう十年の知己の様に親しくなつた。

「張君、君は何日頃上海へ歸へるつもりだ」

「さア、まだ歸らうとは思つて居ない」

「それなら少し手傳つてくれまいか、仕事を……」

「宜しい」

仕事と云ふのは別に六ヶ敷いことではなかつた。張は其本據に寝泊りして一生懸命に團員の世話を焼いた、元來牒報機關と云ふものは平和の時こそ文字通りの牒報機關だ、けれども愈々事變が勃發すると忽ち對敵妨害機關に早變りするのだ、北平西城の本據が既にそれである。

二三の首領株は毎日の様に出掛けた。市中の何處かで其手下と落ち合ひ、日本軍の行動を偵察に行くのである、或るものは日本軍の軍用電話線を切斷しやうとして忽ち捕はれて仕舞つた。或るものは日本側のスパイに天誅を加へたと云つて血まみれになつて來た。其等の人の話を聞くと北平は今や日支兩國のスパイ亂舞の巷と化して仕舞つて居た。

支那軍大捷、日本軍全滅の新聞號外が出て、徹宵戦勝氣分で市中が湧き返へつた翌朝の事である。團長格の陳が慌たゞしく張の部屋に駈け込んで來た。

「張君、愚圖々々して居ては駄目だ、天津に逃げやう、何も持つて行つてはいけない、自動車が待たしてある、日本軍が直ぐに殺到すると云ふのだ」

成る程砲聲が殷々と響いて居る、張には生れて始めての經驗であつた。明敏な頭腦の持ち主ではあるが、此場合どうして可いか判らなかつた。陳に促されるまゝ戸口に出て自動車に飛び乗つた。

五、怪紳士の出現

天津で陳に別れ、獨り南京に歸へつて來た時は、張は極度に疲れて居た。外交部に鄭を訪れると、鄭は眼を丸くして張の寢れた姿を眺めた。

「どうした張君」

「イヤ、どうも非道い目に逢ひましたよ、愈々第二の滿洲事件が始まりました」

「偶然にしろ、偶然でないにしろ、君の云つたことが的中したよ、日本の腰は意外に強い、之でまた北支を併呑されて仕舞ふんであらう」

「僕も確かなことは云へなかつたんですが、どうもそんな気がして成りませんでした」

「もう北支の重要地點は何處も此處も日本軍に占據されて仕舞つた。國府は餘りにも樂觀に過ぎたよ」

「僕は直ぐに之から上海に歸へります、上海の方はどうですか」

「上海は大丈夫、無事平穩だ」

「まさか之も樂觀ではありませんまいね。日本軍よりも日本軍に開戦の口實を與へる無智な軍人や特別任務者が恐ろしいですよ」

「然うだ」

張は何時もの元氣に似ず、悄然として鄭に別れを告げ、自動車に疲れ果てた身體を托して停車場に向ひ其儘上海へ！

x

x

疲れたと云つても張は途中いろ／＼な要務を果し、事務所に還つたのは翌日の夜の八時頃であつた。事務員の差出した書類の中に北平から發せられたらしい一片の電報があつた。開いて見ると通信員スタンレーの電報であつた。最も信賴するチェンバレンと云ふ自國人を紹介すると云ふ旨が記してあつた。

間もなく一人の訪問者があつた。チェンバレンだ。案内させて見ると四十格好の筋肉の締つた頑丈な紳士だ、何處かに油斷の出來ない氣がある。

其紳士は初對面の挨拶が済むと、急に聲を潜めて

「私は實は北支に居るスタンレー君の友人です、昨日スタンレー君からこう云ふ電報を受取りました、あなたの仕事を手傳はして下さいれば有り難いのですが……」

と極めて慇懃な口の利き様だ、スタンレーは北平一帯の通信網を總動員して、此際支那の爲めに盡そうと第二回北平訪問の際誓約した地の通信員だ。

「ヤア其は誠に有り難ふ、實はスタンレー君からもあなたの御出になることを知らせて來て居ります、是非お願ひ致しませう」

「早速御承知下されて有り難ふ、誰れでも可いから毎日午後一時頃こゝへ使ひをよこして下さい」

と云つて残片に一行の宛名を記して鄭に手渡しした。見れば同じ佛租界にある餘り大きくもないホテルだ。

「ハイ、承知しました」

其紳士は話が決まると直ぐ歸へつて行つて仕舞つた。鄭は何んだか狐にでも憑まれた様な氣がしたが、北支での散々の苦難が胸に残つて居るので深くも考へず、其儘寢所に入り、旅の疲れでグツスリと寢込んで仕舞つた。

六、流言は飛ぶ

翌日約束通り使を出すと、使は一通の手紙を持つて歸つて來た。一氣に讀み下して張は卓を叩いて喜んだ。

「實に早い」

其手紙には事變進行中の北支の形勢、並に上海に於ける形勢の險惡さが、断片的だが手に取る様に書いてあつた。

△七月十八日午前七時軍隊〇〇〇名と多量の軍需品を満載した臨時列車山海關を通過△正午同様△午後三時は軍需品のみ通過、貨車十四臺△歩兵約三中隊天津着△陸戰隊本部増員計畫決定△軍艦〇〇午後一時入港

と云つた調子だ。其次の日も亦た其次の日も同じ調子で得難い情報が續々と入つて來た。鄭からは丁重な感謝と激勵の電報が届いた。張に取つては牒報網を張つて以來始めての晴れ／＼した氣分であつた。

其中にも北支の戦局は益々擴大して行つた。新聞には支那軍の勝利が報道されて居るが、チャンパレンから來た情報では何時も敗戦の報道ばかりだ。張は其度毎に不快であつたが、事實の前には如何ともすることが出来なかつた。

七、不思議な事實

三四週間は夢の様に去つた。或る日チャンバレンの處へ送つた使が手ぶらで歸へつて來た。聞けば不在であつたと云ふのである、其翌日も其翌日も同様であつた。張は不安を感じた。

ホテルに電話をかけて聞き合せて見ると、最終の便を送つた夕刻、一人の男が訪ねて來てそれが歸へつた後に何處からか電話がかゝつて來た。それを聞くとチャンバレン氏が出掛け、其まゝ今以て歸へらないと云ふのである。

張は其晩、例に依つてワイダホテルのバーラーに出掛け、獨りウキスキーを飲んで居るとそこへポツクリやつて來たのが、ダンサーの宋秀蘭だ。

「オイ、秀蘭」

「マア張さんでしたの」

「君はいつか此處へ來て僕と一緒に飲んだチャンバレン君を知らないか」

「Cさんですか」

秀蘭は然う云ひながら少しく顔色を變へた。

「妾知りませんわ」

「知らないことはあるもんか、實際のことを話してくれよ、サ之だ」

と張は紙入から幾枚かの紙幣を掴み出して秀蘭の前に投げた。

「マア、有り難ふ、けれども妾しほんとうに知らないんですもの……」

「嘘云へ、頼むから教えてくれよ」

「實はね妾妙なことを聞いたのよ、四五日前Cさんがホールで遊んで居ると、そこへ餘り見掛けない支那紳士が見えましてね、何やらお話して居た様ですが、やがてお二人で出掛けて行つたそうです。そして其晩からCさんは行方不明になつたんだそうですよ」

「フム、不思議だな」

「張さん、それよりも不思議な話があるのよ」

「何んだ」

「此十五六日頃には上海にも戦争が始まるだらうと云ふの」

「嫌だぜ、そんなことを云つて脅かしちや」

「イエエ、脅かしではないの……」

秀蘭は極めて真面目な顔をして次の如く語つた。

数日前一人のロシア人と秀蘭がホールで踊つて居ると、二人の支那青年が来て其ロシア人を呼び出した。

秀蘭はロシア人が一緒に来いと云ふから付いて行くと、或るバーに入つてロシア人は秀蘭と他の二人の支那青年を御馳走してくれた。

其席上での話に、北支方面の戦争をあのまゝにして置いたならば、支那軍は散々日本軍に叩き付けられた擧句屈服するより外はあるまい。此際支那を助けるには、此前の様に上海でも戦端を開き、日本の兵力を兩分するより外はない。

日本には大に戦意がある、陸戦隊の將校一人を何かの機會で拉致惨殺し、之を問題化して陸戦隊本部を大舉攻略すれば、嫌でも日本は本格的戦争に出でるであらう。斷行は八月中旬頃が適當だと相談して居た。そして其計畫にはチャンバレンも参畫して居るらしいと云ふのである。

張は之を聞いて愕然として驚ろいた。それでなくてもそんなことになりはせぬかと内心大いに憂ひて居た處である。併し張は更に驚くべきことを聞かされた。それはチャンバレンの行方不明となつた真相である。

一週間ばかり前、チャンバレンは突然ダンスホールで見知り越しになつた一人の支那人の來訪を其宿泊して居るホテルで受けた。其支那人は夙から彼の素性を知つて居たものか、上海日本陸戦隊配備の圖面を示し五百弗で買上げてくれろと申込んだ。チャンバレンは其圖面を買ふことは彼の素性を明かにする結果ともなるし、亦た眞物かどうか判りもしないものに五百弗の大金を投する勇氣はなかつた。そこで態好く斷つて仕舞つたが、彼としては其圖面が欲しくつて堪らな

い。

彼は其夜關係深い一ダンサーを或るホテルの酒場に呼び寄せ、早速相談を持ち掛けた。

彼の云ふにはその圖面は何も本國政府の役に立つものではない。だが何んとかして之を手に入れば最近別懇となつた南京政府のスパイに高く賣付けることが出来る。若しそれが賣れたら二人で山分けしやうと云ふのである。

ダンサーは案外容易にそれを引受けた。そこでチャンバレンは手引してダンサーを丁度其晩遊びに來た支那人に近付けた。

其支那人は濃厚なダンサーのサービスにすっかり氣を緩めて仕舞ひ、強か酒を飲んだ。連れ込まれた餘り綺麗でもないホテルの一室で、翌朝眼を醒した時には、女は勿論、上衣の内ポケットに入れて置いた大切の圖面もない、失敗つた！と思つたが今更どうすることも出来ない。こんな舊い手口に引掛つた自分の愚かさを悔ゆる外はなかつた。

ダンサーは其儘圖面をチャンバレンに手渡ししやうと思つたが、事は日本陸戦隊に關係のあることだ、一應は愛人である日本人西村某に相談してからと思つて之を西村某に話した。西村某は大に驚いた。そして早速其圖面を携へて陸戦隊を訪問した。

處が其圖面は全くの偽物で而も軍事上無價值同様のものであつた。圖面は其夜チャンバレンの手に入つた。ダンサーは割前の一部百弗を受取り、當分身を隠す意味で西村某とも談合の上、南京へ行つて仕舞つた。チェンバレンは圖面を手に入れたが、一人の商人風の男とホールを出て、其夜からホテルに歸らず、遂に行方不明となつて仕舞つたと云ふのである。

「最近別懇になつた南京政府のスパイ！」

張は思はず顔色を變へた。チェンバレンが最近別懇になつた南京政府のスパイと云へば先づ彼より外にない、張は何となく不安を感じて來た。

八、誘拐から監禁へ

其翌日張はチャンバレンと同國の友人數名を訪問し、彼の素性を洗つて見た、皆な詳しいことを知らなかつた、が、唯だ一人知つて居た。其話に依るとチャンバレンは×國の某武器製造會社の關係者で日支事變を見込んで多量の武器を香港に回送したが、其賣込みに奔走して居たと云ふのである。

張は之を聞いて万事が明瞭になつた氣がした。彼の情報に日支開戦を促す様な事項が多かつたことが今になつて始めて讀めた。そして上海陸戦隊本部攻略運動に彼が参加して居た理由も呑み込めた。唯だ不思議なのは其行方不明になつた理由である。之に就て其人は斯ふ云ふことを云つた。

「殺人、強盜、人攫ひは上海の名物だ。別に不思議はない」

張は悉く呆れ返へつて仕舞つた。ロンドンに居た頃は、自分ながら明敏を誇つて居た。問題の真相を探究することに掛けては多年其道で苦心した人さへ及ばぬ才能を有して居ると極め込んで居た、にも拘らず今まで内外スパイ團の道具に使はれ、それを少しも知らなかつたとは何たる不甲斐なさであらう。

餘りの憂鬱さに其夜又々例のパアラーに出掛けて行つた。いくら飲んでも酔はない、頭痛さへ覚えて来た、戸口を出やうとすると見知らぬ一人の男が

「あなたは張さんでしたね」と聲を掛けた。

「エ、僕は張だが」「それなら」

と云つて男はポケットを探つて一通の書面を取り出し張に手渡しした、開いて讀んで見ると即刻差向けた自動車では是非来てくれると云ふ手紙である。しかも其差出人は人もあらうに行方不明になつたチャンバレンだ。張は無論行く氣はなかつた。今日は頭痛がするからと云つて斷つたが其男はナカノ、承知しない、ともすれば力づくでも連れて行かうとする、張は益々不安を感じた

少し怒聲を張り上げ

「今日は頭痛がして行かれないから、亦た其中にお目に掛ると云つてくれたまへ」

と云ひ棄て、無理に乗せられやうとした自動車の隣の自動車に飛び乗つた。

車は勢ひ好く走り出した。だが運轉手は何處へ行くのかとも聞かぬ、たゞ急スピードに走つて行く。「オイ何處へ行くんだ」餘憤の未だ納まらない張は運轉手に怒鳴り付けた。「へい、分つて居ます」運轉手は平氣だ。「俺はまだ何んとも云やしないぞ……止める々々々車を止める」

と猛り立つたが車は益々急スピードだ、張は遂に堪り兼ねた。いきなり立上つて背後から運轉手の帽子を奪ひ取り其頭に投げ付けた。車は止まつた。そして二人の男が西側の扉の外に「ユ」と現はれた。一人は確に先刻チャンバレンの手紙を届けに來た男だ。張はギョツとした。

得體の知れない廣い邸宅の地下室に押込められた張は、其夜無理に日本陸戦隊の配備圖面を押付けられ、五百弗の小切手を書かされた。そして其まゝ監禁されて仕舞つた。

一週間ばかり経つて漸く釋放され、魂の抜けた人の様になつて再び佛租界の事務所へ歸へつて來たが、其時は既に上海は戦火の巷と化して居た。(終り)

昭和十三年五月二日印刷
昭和十三年五月五日發行

【亂舞するスパイの群れ】
定價 十 錢(送料三錢)

著 者 石 坂 精 一

發行人 東京市芝區新橋四ノ四六
前 川 傳 二

印刷所 東京市芝區新橋三ノ二〇
更 生 社

發行所 東京市芝區新橋四ノ四六
昭 和 書 房

不 許 和 製

(全國主要譯
賣店・書店に
て發賣)

大 取 販
東京鐵道局公認(鐵道保養會・鐵道公濟會)
(京阪神)新正堂書店 (名古屋)南進堂書店
(宇都宮)淺野屋書店 (静岡)吉見書店
(福 島)博 向 堂

5
5